医療薬学会海外研修報告

平井みどり

2008 年 5 月 29 日から 6 月 8 日までの 11 日間、日本医療薬学会がん薬物療法海外派遣事業、2008 年度 JSPHCS/BMKK 海外研修プログラムに、全国から選抜された 4 名のがん専門薬剤師（北から順に、松井礼子氏、矢野良一氏、北田徳昭氏、柴山良彦氏）と共に参加した。というはずであったが、5 月 29 日我々が搭乗したユナイテッド便が、ジェネレータ不調のため結局飛び立てず、翌 5 月 30 日に成田を発つことになった。現地の旅行社の方々などのサポートを頂いて、なんとか無事到着。シカゴでは米国臨床腫瘍学会（ＡＳＣＯ）第 44 回年会に参加し、参加者の多さと会場の広さに圧倒され、また最新のがん化学療法や臨床研究の成果などに目を見張る 4 日間を過ごした。会場が広く、多くのセッションが同時進行するため、リアルタイムで参加できないものも多い。そのため毎朝前日のトピックスを紹介し、寸評を加えるセッションが開かれる。またタブロイド判の速報紙様のものの配布や、ウェブでプレゼンテーションを配信するなど、勉強材料には事欠かないよう配慮されているのが印象的であった。今年からコメディカルの参加が別枠で設けられ、生涯教育の単位としても認められることになっている。それにしても、参加した 4 名のがん専門薬剤師の皆さんの勉強熱心なこと。明日の診療に生かすぞ！という意欲満々で、敬服するばかりであった。

6 月 3 日午後にテキサス州ヒューストンに移動、シカゴとはうって変わった暑さの中、4 日から 6 日までテキサス大学ＭＤアンダーソンがんセンターにて、Clinical Exchange Program 研修に参加した。医師・薬剤師・看護師・臨床心理士・病理学者などによる講義と外来見学参加、薬局をふくむ施設見学などを行い、米国がん医療の圧倒的な人的・物量的豊かさにため息がでる思いであった。もちろん、米国の医療も多くの問題を抱えており、表面的な豊かさだけで判断はできないが、ＭＤアンダーソンがんセンターで働くスタッフは、がんの撲滅にむけた明確なミッションと、患者中心の医療の実践を常に念頭において活動していることが、我々のような外来者にもひしひしと伝わってきた。また患者への情報提供や、患者教育プログラムの充実は素晴らしく、患者や家族が自由に利用できる図書館では、専属の司書が利用者の疑問に丁寧に対応する。実際、患者が医療スタッフに寄せる信頼は、極めて大きなものがあることを肌で感じたのだが、そのような医療を実践するには潤沢な金銭的・物的・人的資源の基盤が不可欠である。年々削減される医療費によって生じた隙間を、医療従事者の善意と自己犠牲で埋めるような、日本的医療体質を見直すべきではと強く感じつつ、6 月 8 日無事帰国した。